

平成 30 年度生産性・品質向上のための IT 活用の現状と
ものづくりマイスターの活用に係る好事例発表及び意見交換会について

1. 日 時 平成 30 年 10 月 29 日（月）13:30～15:00
2. 会 場 地域職業訓練センター 3 階視聴覚研修室
3. 参加者

コーディネーター 四国職業能力開発大学校 電子情報システム系
職業能力開発准教授 佐竹 一孝 氏

事例発表者 SETOUCHI drip 山地 武 氏

意見交換会参加企業等

イヌイ株式会社高松工場
シコク景材株式会社
四国計測工業株式会社
四国工商株式会社
日東河川工業株式会社
株式会社マキタ
株式会社レクザム
株式会社 DynaxT
香川県立高等技術学校高松校

参加者 8 社 1 校 12 名

4. 生産性・品質向上のための IT 活用の現状について事例発表

事例発表 SETOUCHI drip 山地 武 『システム導入事例を通じた IT 活用の勘所』
--

(概要)

事例 1 : 報告資料集計のための集計ツールについて。導入前は手作業による集計を行ない、その後資料の作成さらにチェック作業と入力を行なっていたため 2～3 日かかっていた。集計ツールの導入・活用により、作業時間を 1 時間程度にまで削減、また転記ミスもなくなり、事務負担を軽減することができた。

基幹システムについては IT 化しているが、周辺事務についてはまだ手作業で行なっている企業が多い。基幹システムに組み込むためにはコストがかかるため、ツールを使うことによる IT 化を行なうと作業時間の短縮ができる。また作業負荷に対するストレスも軽減することができる。

事例2：事業内各種業務システムのサーバー仮想化について。各種事業ごとにサーバーを使用し、システムの構築、バージョンアップの度にサーバーをその都度買い替えていた。仮想サーバーに統合することでOS及びバージョンアップのみの対応で済み、ハード機器に係るコストを削減することができる。ただし初期導入において費用が掛か

るため、コストパフォーマンスを考える必要がある。

事例3：クラウド型勤怠管理システムの導入について。クラウド型勤怠管理システムの導入により、勤怠状況をデータにより把握できるようになった。給与計算なども連携してスムーズに行うことができ作業負担を少なくすることができた。クラウド型なので勤怠状況がリアルタイムで共有でき、自社でシステムを作ることもないので、すぐに利用が可能である。

以上の事例のようにシステム導入により効率化は図られる。導入にあたっては企業側とベンダーとの意思疎通が上手くいかない期待通りにならないことがある。費用をかけて導入したが現場の要望に即していない、機能がたくさんありすぎて分からず現場に混乱をきたしてしまった等が起こらないようにする。このためトップダウン方式で進めるのではなく、やりたいこと、機能の目的など現場の意見を十分聞き入れて行うことが重要である。コミュニケーションをしっかりと取り、計画をきちんと作成し、目的を明確化してシステム導入を行う必要がある。



5. 意見交換会では次のような意見が聞かれました

- 企業がシステムを活用しようと考えた時に、必要な分野に長けているベンダーを探すのが難しい。どこに相談して良いのかがわからないため、IT化を進めにくい。
- 本年度からクラウド型勤怠管理システムを導入したが、セキュリティの面は大丈夫なのか。
- 受注生産がほとんどのためデータ取得などはやはり人の手が必要でありIT化が難しい。
- 勤怠管理システムを導入した際に目的などが周知徹底されてなく、何か問題があった場合はその都度対処法を検討している状況。今後現場に導入する際には、現場が必要とするもの、起こりうる問題、対処法等を明確にしてから導入しなければならないと思った。
- 今までは情報関連に強い社員一人が社内システムを構築・運用していたが、今後定年を考えた時にどうするか問題になっている。既存のシステムに転向するにしても、現在使用しているパソコンが古くマニアックなためデータを送ることもできず、見直しに時間がかかりそうである。
- 自社の現場へシステム導入する際には、まず何を行いたい意見を出してもらいふりいにか

け、メーカー複数社に見積りを取り選定していった。2年ほどかけて構築を行っている。将来的には、工場内の物の運搬も自動化できればとも思う。工場を建て直す時に色々考える必要があるのが実際にはかなり時間がかかると思う。

○ 営業の受注から設計部での作成、製造部・現場への発注まで自動化されており、加工の進捗状況もリアルタイムで共有できるシステムを導入している。

○ 以前は製品の寸法計測は専門の品質管理員が計測していたが、自主管理に変更し加工者が計測しタブレットに入力、管理を行っている。また、機械の稼働率が分かるシステムを導入し、社員の配置等を考えている。導入コストはかかるが、社員の効率的な活用ができ、必要な場所に社員や資金を回せるようになった。



6. 全体総括（座長まとめ等）

職人技というところでは IT 化はなかなか難しいと思われるが、日常の定型的な仕事については IT 化を進めやすい。人間が得意なところ、IT が得意なところを見極め、機械化出来るかどうか考えることが必要である。

また、現場で使うシステムの場合、現場が何を求めているか明確でなければならない。そのため十分に話し合いが出来る環境と時間を作る必要がある。

まずゴールを明確化し、やりたいこと、必要なもの、導入コスト、ランニングコスト等を考え、各社に合った生産性・品質向上のための IT 化を進めていただきたい。